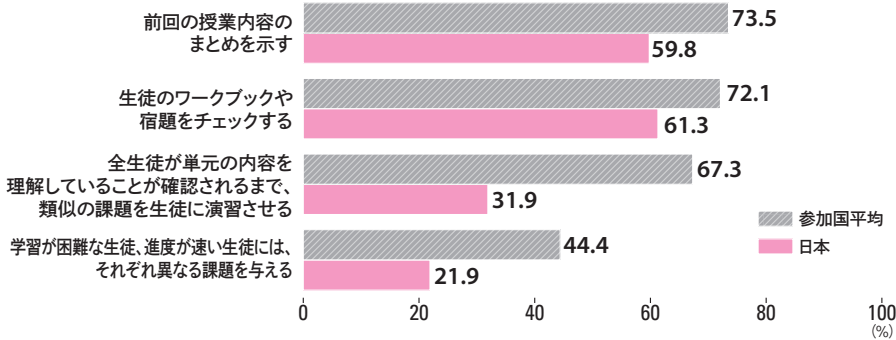


全国の学校が挑戦する多様な取り組み

日本の学力格差への取り組みは、諸外国と比較してどのような状況か。全国の先生方が学力格差に有効と考えている手立ては何か。調査結果から明らかにすると共に、本特集の取材の過程で全国の中学校にヒアリングを行った中から、特徴的な取り組みを紹介する。

図1 諸外国に比べて、生徒の理解度に応じた取り組みが少ない

Q. 年度を通じて、対象学級において、以下のことをどのくらいの頻度で行いますか。

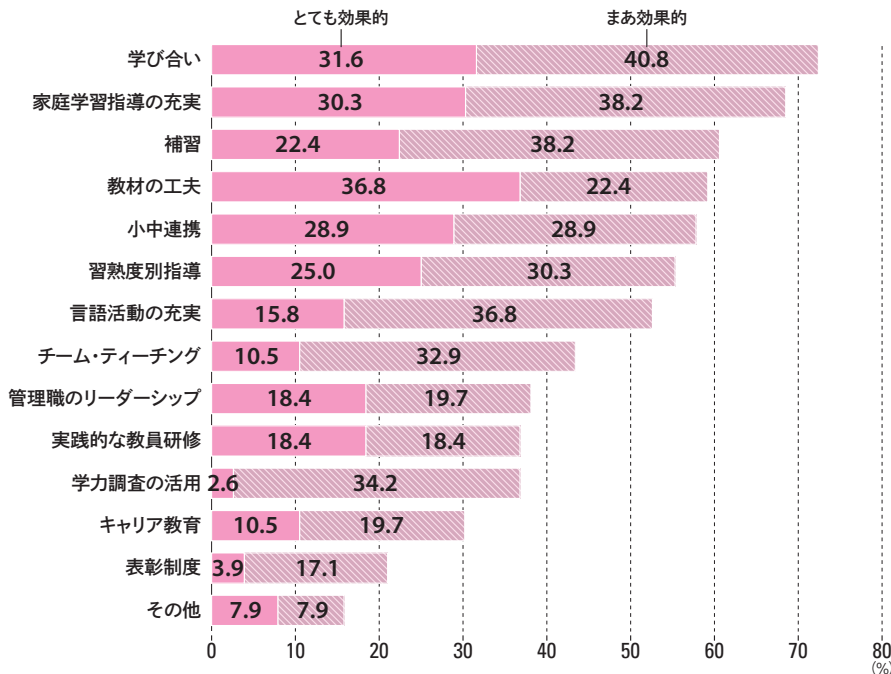


注) 4段階のうち「ほとんどいつも」「しばしば」と回答した割合の合計値
出典/ OECD国際教員指導環境調査(2013年2~3月実施。34カ国・地域が参加。日本は192校、3,484人が回答)

指導方法を国際比較した調査結果を見ると、日本は諸外国に比べ、生徒の理解度に応じた取り組みの頻度が低いことが分かった。同調査では、「支援職員の不足」も、参加国平均 46.9%に比べて、日本は 72.4%と大きく差が付いた。このような厳しい条件下にあって、生徒の学力に応じた個別指導をいかに進めていくかが、課題といえるだろう。

図2 学力の二極化に有効な取り組みは「学び合い」「家庭学習指導」「補習」

Q. 「学力の二極化・多極化対策」として効果があると思われる施策はどれですか。



注) 14施策の中から「とても効果的」「まあ効果的」と思われるものを全て選択
出典/「VIEW21中学版」読者モニターアンケート(2014年6月実施。回答者数76人)

小誌読者モニターの先生方に、学力の二極化・多極化対策として効果があると思われる施策を聞いたところ、トップは「学び合い」で、「家庭学習指導の充実」「補習」と続いた。補習は、立川市立立川第一中学校の記事でも紹介したが、いずれも幅広い学力層に応じた指導が可能であり、多くの学校が取り入れている。「教材の工夫」「小中連携」「習熟度別指導」「言語活動の充実」も、半数以上の先生から支持されている。

広がる学力格差への多様な取り組み

図3 広がる学力格差に対するさまざまな実践事例

施策	実践内容（ねらい）
学び合い	<ul style="list-style-type: none"> ◎自分の考えを書いたものをペアで共有した後、机間指導でチェックしておいた生徒を意図的に指名して、学級全体に広げ、焦点化することで、多様な考えに気付かせるようにしている。自分の考えを書けない生徒もペアの生徒から気付きや発見を得られるため、学びのきっかけになっている。活動を継続するうちに書くことに抵抗感が薄れ、結果として落ち着きが生まれたため、成績も向上した。[宮城県／D中学校] ◎「教えるのはムダ」と言う生徒がいたが、教員がきちんと褒めると共に、教えることの意味（教えることは難しいが理解が深まることや、説明できてはじめて本物の学力であることなど）を伝え、教えてもらった生徒にも感謝の言葉を伝えるように指導したところ、自ら他の生徒にも教えるようになった。[岩手県／I中学校]
家庭学習指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> ◎授業で解説を聞いている時は理解できたつもりでも、家庭では解けない生徒がいる。1人で勉強する方法をいかに授業で伝えるかが大事。単なる解説ではなく、「この時、既習事項のここを使う」と具体的に示したり、「ここでは何を伝えればいいかな？」と考えさせたりすることで、1人で解く時も出来るようにした。[青森県／T中学校]
補習	<ul style="list-style-type: none"> ◎毎週月曜日は「ノ一部活デー」にして、国数英を軸に、教員全員で放課後補習を実施。実技教科担当教員にも国数英を指導してもらうので、生徒4～5人につき教員1人と少数指導が出来、参加する生徒の目も輝いている。[佐賀県／M中学校]
教材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ◎授業で使うワークシートを「100字で」「150字で」「2段落で200字で」など、学力層別に3種類作成。どれを選ぶのかは生徒に任せると、各自それぞれに合ったものを選び、授業での達成感が高まった。下位層にも「押し付けられた」という意識をもたせないようにすることがポイントだと感じている。[青森県／T中学校] ◎単元が終わると実施する「確認プリント」は、1枚のプリントの中に「基礎」から「応用」まで段階別に問題を作成することで、どの生徒も必ず解けるため、積極的に学習に取り組むことが出来た。[愛媛県／H中学校]
小中連携	<ul style="list-style-type: none"> ◎小学校の算数加配教員に週3回、出前授業でTTに入ってもらっているが、小学校時代に算数が苦手だった生徒を把握しているので助かる。1・2年生向けの夏季補習でも、5日間で延べ30人ほどの小学校教員が出前授業。小学校の内容からフォローしてくれ、小学校に戻ってから自分の授業にも生かしている。[山口県／K中学校] ◎中学1年生の3月に、小学6年生との合同授業で、1年間の英語で習ったことを発表させている。中学1年生は発表準備の過程で、理解できていなかったところを補えるため集大成になる。小学6年生は1年後のゴール（目標）が明確になる。その他、教員が小学校の授業見学や研究会などに行きやすいように、必要に応じて時間割を組み替え、自習にならないようにしている。[宮崎県／M中学校]
習熟度別授業	<ul style="list-style-type: none"> ◎数学で学力格差が大きいため、1年生後半からテストの結果に応じて、2学級を4つの習熟度別クラスに再編している。2年生は生徒の希望も取るが、ある程度は意図的にクラスを分ける。3年生は完全に習熟度別だ。単元によってもクラス替えをした結果、低学力層の底上げが出来た。下位層の生徒も、少人数指導で「やれば出来る」と思えたら、向上心が芽生える。[東京都／F中学校]
ユニバーサルデザイン	<ul style="list-style-type: none"> ◎ユニバーサルデザインは得意不得意による格差も補える。授業の導入時に50分間の流れを示すことで、落ち着いて授業に臨んだり、重要箇所は色や記号を全教科で統一すると、学力下位層の生徒にとってもポイントが分かりやすくなった。[佐賀県／M中学校]
ICTの活用	<ul style="list-style-type: none"> ◎社会科の単元導入時に、教室設置のプロジェクターで単元のDVD（3分間程度）を見せると、学力下位層の生徒にも興味を視覚的に喚起できる。教科書に載っていない映像や、鉄砲の大きな音など、シンプルなほうが効果が高い。[東京都／O中学校] ◎教室設置の電子黒板に、デジタル教科書を投影しながら授業すると、「〇ページを開いて」と言ってすぐに開けないような生徒でも授業についてこられる。顔を上げて説明を聞くことになるので、生徒の理解度も把握しやすい。また、グラフの変化は動的に見せられるので、理解が深まり授業に参加するようになる。[佐賀県／M中学校]
保護者連携	<ul style="list-style-type: none"> ◎通知表は終業式に生徒へ渡すのではなく、長期休業前の3日間、三者面談期間を設け、教科担当からのコメントと共に1人ずつ保護者へ手渡している。長期休業中の学習計画や、次学期の目標につなげている。[三重県／K中学校] ◎「半日学校見学日」を設定。保護者に、授業中だけでなく、休み時間や掃除時間も含め、学校生活の実態をじっくり見てもらう。その中で、提出物の忘れ物や居眠りなど、家庭生活（学習環境や就寝時間など）と結び付けて要因を解説していくと、協力を得やすくなる。[滋賀県／O中学校]